紀要『人文・自然研究』第 19 号

# スポーツの本質と価値の理論

青沼裕之

2025 年 3 月 25 日発行
一橋大学 全学共通教育センター

人文・自然研究　第 19 号

Hitotsubashi Review of Arts and Sciences 19

2025 年 3 月 25 日発行

発行：一橋大学全学共通教育センター

186-8601 東京都国立市中 2-1

組版：精興社

# スポーツの本質と価値の理論

青沼裕之

## はじめに

筆者は以前、スポーツの美とは何かについて論述[1]した際に、それはスポーツの価値の重要な一構成要素だとして論を展開したが、いずれその延長線上でスポーツの価値について追究しなければならないと考えていた。本稿では、課題としていたスポーツの価値について究明したいと考えるが、そのためにはまず、スポーツとは何か、つまりスポーツの本質について明らかにすることが必要であることが自覚された。価値を体現するスポーツそれ自体を究明しておかないと、議論がとりとめもなく膨らんでいき、何でも価値とされてしまうからである。現にこれまでの研究では、スポーツの価値についての考え方や定義は論者の数だけあり、論拠もバラバラであり、論述の方向性も定まっていない。

先ずはスポーツの本質について究明するに当たり、膨大な先行研究の中から検討に値する論文、著書を選んで批判的考察を加えていく必要があるのだが、さらにここにいくつもの大きな課題が表れてくる。

第１に、本稿で対象とするスポーツを古代ギリシャ、ローマ時代から現代に至るまでのあらゆる運動競技とするのか、それとも 19 世紀にイギリスとアメリカで創出された近代スポーツに限定するのかという問題がある。第２に、体操やダンス、武道、はたまたｅスポーツはスポーツなのかというように個別的に追求していくのか、あるいは大筋スポーツとはこういう特性や独自性をもった文化だというように普遍的に追求していくのかという問題がある。第３に、スポーツを普遍的に追求していくとして、さらにスポーツを外在的にとらえるのか内在的にとらえるのかという問題がある。

本稿では、第１の問題について言えば、近代スポーツ（以下、すべてスポーツとする）に考察の対象を限定する。何故かと言えば、今日の世界に普及しているのがそうしたスポーツであり、歴史的に培われてきた競技様式とそれを規定するルールによって構成されるスポーツについて考えるのが本稿の課題とするところだからである。皇居の周りを走ったり自宅前の空き地や路地でキャッチボールをしたりすることを否定するものではないが、これらをスポーツの範疇には入れない。

第２の問題に関しては、スポーツの本質究明の観点からは普遍的な追究がふさわしいと筆者は考えている。つまり、スポーツの普遍的な概念規定がなければ、美術や音楽や文学などの他の文化との相違が理解できないし、体操やダンス、ｅスポーツがスポーツかどうかを議論することは袋小路に迷い込むことになるだろうからである。本研究ではそうした個別事象に拘るものでない。第３の問題については、本論の展開の中で外在的および内在的な視点を明確にし、双方の視点から論述していくことになる。

そして、スポーツの本質究明を果たした後に、ようやくスポーツの価値について検討することになるが、その際に、「価値」とは何か、に関する議論を踏まえて進めることになる。先行研究では、価値に関する規定がなされておらず、論者によって価値に相当する事象がとりとめもなく広がっているからである。スポーツの価値を意義、重要性、貢献など

と同義で使用している研究者、実践家は多く、このことにあまり目くじらを立てる必要もないであろうが、重要な実践的課題として、国のスポーツ政策の立案・実施において、スポーツ独自の価値を明確にして、その価値の実現を中心に置いた方途を見出していくためには、やはりスポーツの価値の厳密な規定が必要なのである。

改めて本稿の課題を記すならば、スポーツの本質と価値の究明である。

## 1. 勝利を第一とする現代スポーツのあり様

### 1-1. メディア等の巨大企業に支配されたスポーツの現況

さて、スポーツの本質を普遍的に追求するにあたって、現代のスポーツがどのような経済社会状況のもとに存在しているのか、を確認しておく必要がある。これはスポーツの現代的特徴を明確にするためであり、スポーツを外在的にとらえる視点である。

周知の通り、スポーツは19世紀以降の資本主義社会の発展の過程において創出されたため、これまで多くの研究者がスポーツと資本主義との関係について探究し論述してきた。資本主義社会では利益を産みそうなものはすべて商品として扱われるため、スポーツも商品として利用されうるものとなり、現代に至って益々多くの問題を生み出している。その点に関して、1938年に刊行された『ホモ・ルーデンス』の中で、ホイジンガは以下のように警鐘を鳴らしている。それは第12章の第2節「スポーツは遊びの領域から去ってゆく」に記されている。

> 現代の社会技術は、大衆デモンストレーションという外面的効果を高めることもちゃんと心得ているのだが、それを発揮してかち得た完璧さをもってしても、オリンピック大会とか、アメリカ諸大学の組織された各種スポーツとか、大声で宣伝されている国際競技会とかが、スポーツを文化を創造する活動へと高めることができないでいる事実は、少しも変わりないのである。どれほど遊戯者、観衆にとって意義あるものだとしても、それは一つの不毛な機能であることに変わりはない。そのなかでは、古代以来の遊びの因子はその大部分が滅び去っている(2)。

ホイジンガにしてみれば、スポーツが「遊びの領域」から去ってゆき、「真面目なものとして受け取られる方向に向かっている」(3)ことは、アスリートと観衆にとっては意義あるものであっても、スポーツを文化として高めることのできない不毛なことであった。

それでは、ホイジンガが警告する大衆デモンストレーションとしてのスポーツの不毛さとは何なのか、スポーツが真面目なものとなる問題点は何なのか、この点を21世紀の現状に即して考えてみたい。哲学者の多木浩二の以下の指摘が参考になる。

> テクノロジーの進歩によって、もはや手動ではなく、電気時計で百分の一秒まで測定されるようになると、ゲームはこの微細な差異を追求しはじめた。たしかにこの差異はそれ自体を長さに還元するとほとんど意味をもたない。だがスポーツはこのディジタルな差異を追求するのである。そのときディジタルな情報からなる領域に、競技者いなスポーツ全体がすっぽりとはまっているのである。スポーツはメディアに媒介された情報の集合から生じる巨大な力にのみこまれてしまった。／おそらくわれわれが普通、資本と呼んでいる経済的な力も、こうした力のひとつでしかないだろう。だから経済的資本とスポーツの結合だけに気をとられるのは疑問である。純粋なスポーツ

と利潤追求の資本とが決して結びつかないという建前を強弁することは無意味であり、それを擁護することもまた無意味である[4]。

現代のスポーツは情報戦だと言われるとおり、あらゆるデジタル機器を使って数値化した情報を用いて、チームは、また個々のアスリートは微細な差異を追求し勝利を目指す。そして、野球選手は打者としての打率、本塁打数、打点、盗塁数、投手としての勝敗、防御率で細かく評価され、そうした数値に影響されて調子を崩すことがままあり、サッカーやバスケットボールなどの球技でもチームの勝率、個々人の得点等で評価される。こうした事態はプロのみでなくアマチュアのスポーツ界にも広く深く浸透してきている。

また、メディアがスポーツ界に影響力を持ち始めると、競技会の開催時期、試合時間、等にまで介入するようになる。例えば、米国のメディア企業NBCユニバーサル（NBCU）は、2021年から32年までのオリンピック大会の放映権料として77億5000万ドルを国際オリンピック委員会（IOC）に支払う契約を結んだ見返りとして、米国のNBAリーグやヨーロッパ各国のサッカー・リーグの始まる前の時期、暑熱期の7月下旬から8月中旬にかけて夏季オリンピックを開催するようにIOC理事会に圧力をかけた。またこれほどの大事件ではないにせよ、メディアの圧力によって、バレーボールでは放送時間内に収まるようにラリーポイント制を導入し、フルセットとなった5セット目には15点先取となった。テニスでは各セットで6—6となったときに7ゲームからタイブレークを導入している。

つまり、ホイジンガが大衆デモンストレーションとなったスポーツに警鐘を鳴らし、多木がその現代的状況を的確に浮き彫りにしたように、現代のスポーツ競技会はアスリートのパフォーマンスを最大限発揮できる場というよりは、人々の消費（テレビ視聴、入場チケット購入、グッズ購入等）を促すことをねらったメディア等の巨大企業による見世物と化しているのである。

### 1-2. 男性優位の現代スポーツの問題性

スタジアムやアリーナが建設され、スポーツイベントがメディアによって取り上げられテレビ中継されることで、多くの観衆や視聴者の注目の的となった現代のスポーツ界にあって、潤沢な資金提供を受けてアスリートは指導者とともに益々競技力を向上させていく。陸上競技や水泳では世界記録がどんどん塗り替えられているし、サッカー、バスケットボール、野球、バレーボール、バドミントン、卓球等での技術・戦術も非常に熟達、複雑化している。100メートル競走ではもはや人間では新記録は望めないのではないか、というところまで来ている。

デジタル技術によってあらゆる記録が数値化される現代のスポーツでは、記録の更新が中心命題となっており、そのためにアスリートは合理的かつ計画的なトレーニングを積み重ね、その種目に適合した身体を形成していく。

記録の向上とそのための身体の形成がアスリートの主要目的となると、やはり女性スポーツよりもスピードとパワーに勝り記録の良い男性スポーツに人々の目が向かわざるを得ない。その上、プロ・スポーツではまだまだ賞金額で男性優位の差異がある。こうした男性優位のスポーツの在り方を問題としている研究者は数多いが、ここでは先述した多木の主張が注目に価する。

それ（スポーツは人格に美徳をもたらすというトーマス・アーノルドやクーベルタン

の主張―引用者注）はまさしくヴィクトリアンの男性紳士の道徳以上のものではなかったし、それは女性を公的な場（例えばオリンピック）でのスポーツから排除することを含んでいたのである。他方ではスポーツが健康に資することから、女性のスポーツ実践は認めていた。それは、たんなる排除の代償ではなく、ある種の優生学的思想の片鱗が覗いていたのである。この男性身体を基底に据えた「虚構としての理想」は、オリンピックに女性が参加することだけで充分に潰えさるが、その後もスポーツの現実はつねに男性身体の上に形成されてきた。これはもはや「理想」ではなく、政治的「虚構」であったのである(5)。

以上のように現代のスポーツは、その功罪を問うことは別として、男性優位のもとに記録の向上を追求する文化としての特徴をもっているのである。

### 1-3. 優勝、世界一を追求するアスリートの心性

メディアの仕掛けのもとに、またファンの応援を受けて、記録や勝利をひたすら追い求めるスポーツ界にあって、現役時代に数多くの業績を残したもとラグビー日本代表の平尾剛は、心理学者のアルフレッド・アドラーが「すべての人間には『優越性の追求』という普遍的な欲求がある」とする言説にも依拠して、スポーツには「優越性の追求」とその裏返しとしての「劣等感」がつきまとうと述べている(6)ように、トップアスリートは優越性の欲求を強くもっている。

例えば、現役メジャーリーガーの大谷翔平がロサンゼルス・ドジャースへの移籍を決定した大きな要因に、ドジャースがワールドシリーズに進出して優勝できるチームであると報道されたことや、多くの人にはあまり馴染みのない登山の世界では、誰も登ったことのない山、誰も辿ったことのないルートを選んで登攀したいという欲求が能力の高い登山家を突き動かしてきたことが、その典型例である。

世界の頂点に立ちたいというトップアスリートの意識は、対象となるスポーツ自体にも変化を及ぼしていき、技術自体を高度なものにしていく。サッカーでの精度の高い強いパスとそれを受け止めるトラップ、高速のパスをつないでゴールを目指すパスワークの技術等は、大変高度なものとなっている。2010年のワールドカップを制したスペインチームのサッカーは、その見事な典型例であった。また登山の技術も、その装備も含めて大変高度化している。

ただし、逆説的な言い方になるかもしれないが、世界で最初にエベレスト（チョモランマ）に登頂したイギリス隊の登山家のエドモンド・ヒラリーとネパール出身のシェルパのテンジン・ノルゲイは、「どちらが最初に頂上を踏んだのか」という記者の質問に「同時に」と応えたし、テンジンが亡くなったときに葬儀に参列したヒラリーが「テンジンこそ最高の登山家だ」と述べていたことは、仲間への信頼と賞賛の意識が強くあり、自分だけが一番でなければならないという意識にとらわれていなかったことも理解しておかねばならない。自分が頂点に立てるのも仲間（同僚の登山家、数多くのシェルパ、出資者等）の存在があってこそだという理解である。

さらに平尾剛は、お互いが切磋琢磨するために必要な意識として〈競争主義〉を重視しているが、結果としての勝利のみを追求する〈勝利至上主義〉はスポーツを破壊するものだとして克服の対象としている(7)。

別の事例であるが、近年成長のめざましい日本バスケットボール界では、男子日本代表チームが2023年8月25日から開催された「FIBAバスケットボール・ワールドカップ

2023」で、最終順位19位となりアジア1位の成績を収め、その結果をもって2024年7月24日から開催予定のパリ2024オリンピックへの出場権を獲得した。NBA開幕前の大事な準備期間中にもかかわらず、NBAフェニックス・サンズ所属（当時）の渡邊雄太はパリ・オリンピック出場権の掛かったこの大会で日本チームに合流し大活躍した。また、同年3月21日（日本時間3月22日）に開催された「2023 WORLD BASEBALL CLASSIC」で優勝に貢献したMLBサンディエゴ・パドレス所属（当時）のダルビッシュ有も大谷翔平も同様で、MLB開幕前の貴重な準備の時間を犠牲にしての出場であった。彼らは金銭的利益よりもパリ・オリンピック出場、WBC優勝を追い求めたのである。

つまり、優勝そして世界一になることが、トップアスリートにとってはスポーツをする大変大きな動機となっているのであり、指導者、チームメイト、スタッフ等と協力してその目的達成を目指すのである。ただし、賢明なアスリートは結果のみを追い求める勝利至上主義に陥ることなく、長い自分のスポーツライフを見通して自らの技術向上の課題に向き合っていることも付け加えておかねばならない。

### 1-4. スポーツ改革像の明確化

これまでの議論で、如何にトップアスリートが優勝そして世界一になるよう仕向けられ、かつアスリート自身も勝利を追い求めている現状が明らかとなった。それが良いことか悪いことかは人により様々に解釈されるであろうが、これが現代スポーツの様相であることは間違いない。

しかし本稿では、以上のようなスポーツの様相をそのまま受け入れて、スポーツの本質を究明していくことはしない。現代のスポーツにあっては、自分およびチームの技術・戦術の向上めざして日々練習に励むというスポーツ本来の自己確証の契機が根底にありつつも、ホイジンガや多木が指摘しているように、過度に記録や勝利を追い求めて遊びの性格を失ってしまうような疎外された状態をスポーツは併せ持っているのであり、そのようなスポーツの疎外された状態を克服・止揚していかなければ、高齢者、障がい者を含む多くのスポーツを愛好する市民の受け入れるものとはならないだろう。そして、スポーツの疎外された状態はトップアスリートの間の分裂を来すものともなるだろう。

ただし、そうしたスポーツの負の側面（資本の力でねじ曲げられ、かつ国威発揚の手段とされた勝利至上主義的なスポーツの様相）を変革していくとしても、オリンピック・ムーブメントのモットーにあるような「より速く、より高く、より強く―共に」（Citius, Altius, Fortius – Communiter）を追い求める歴史的社会的な産物としてのスポーツにおいては、「スポーツにおけるシスジェンダー男性優位と性別二元性という構造」[8]を転換することが困難であることは否めない。

そうした自覚に立ってまず我々にできることは、市民アスリートの立場からこれまでのスポーツのあり方についての反省を明確にして、将来に向けてのスポーツ改革像を示していくことだろう。メディアの仕掛けや多くのトップアスリートの間に浸透している卓越性の原理、勝利至上主義に批判意識をもち、その克服を目指さなければならない。

この問題に関わって久保健が示唆に富む指摘をしている。久保は、スポーツ教材を中心として構成されたこれまでの中学・高校の学校体育において、「私の文化ではない」と見極めて降りてしまった人々、特に女性の中に、成人になってからヨガや太極拳、ウォーキングやジョギング、登山、舞踊、古武術、ボディワーク等にいそしむ人が数多く見られると分析し、そうした人々のためにも「体と動きを耕し・探求し・楽しむ文化」（略称して「かうたたラブ」）が必要ではないかと主張している[9]。「かうたたラブ」という呼称が良

いかどうかは別として、こうした文化がスポーツと並んで重視され、学校体育はもとよりスポーツ庁の「スポーツ基本計画」にも取り入れられ、普及されてよいであろう。そうであれば、「スポーツ基本計画」と呼称するよりも「身体運動文化基本計画」とする方が、名は体を表すことになるだろう。

要するに、スポーツとは19世紀後半にイギリスやアメリカで創出され、世界に普及した西洋近代的な文化であり、人々にとって重要なものであるが、競い合うためには一定の身体操作能力と技術水準を必要とし、それを身につけた人々が享受できるような限定された行為の文化であると言える。それに対して、スポーツ以外にも太極拳や古武術等の様々な東洋的身体技法、舞踊・ダンス、ピラティスやフェルデンクライスメソッド等のエクササイズが別に存在していて、こちらも人々にとって重要な身体運動文化なのである。スポーツは身体運動文化の一つのジャンルであって、それ以上でもそれ以下でもないということである。

以上のように、資本の論理と国威発揚の手段とされ、また過度の勝利追求を求めるような現代のスポーツのあり方を反省し改革していくことを念頭に置いて、まずはスポーツの本質究明に向かいたい。

## 2. スポーツとは何かをめぐる議論

### 2-1. スポーツの定義に関する諸説の検討

スポーツとは何かについての議論をするときに、多くの研究者が研究の取り掛かりとして取り上げるのが、1951年に出版されたベルナール・ジレの『スポーツの歴史』に記されたスポーツの定義である。この節ではスポーツを内在的にとらえることになる。

ジレはまず、カール・グロースが「遊戯のうちに未来の活動に対する予備的鍛錬を見ている」として、スポーツの条件に「遊戯」を挙げ、さらに時間、距離、重力および自然との闘い、競争相手との闘い、自己との闘いをもって「闘争」を条件に挙げる。この「闘争」の条件によって、ジレは体育とスポーツを区別する。「体育はすべての人に適するが、スポーツはえらばれた者だけがなしうるのである」と。そして、「トレーニングの必要ということのうちに、われわれはスポーツと本来の意味の遊戯との相違を見出すのである」として、「激しい肉体活動」を3番目の条件に挙げる。このようにしてジレは、「ひとつの運動をスポーツとして認めるために、われわれは三つの要素、即ち、遊戯、闘争、および激しい肉体活動を要求する。」と結論づけている(10)。

筆者は、ジレがスポーツの条件または要素という捉え方をしていることに注目し、さらにこれを筆者の用語では「構成要素」として、今後の議論を展開していきたい。

加えて、1964年東京オリンピックの際に国際スポーツ・体育協議会（ICSPE）が「プレイの性格を持ち、自己または他人との競争、あるいは自然の障害との対決を含む運動はすべてスポーツである」と定義している。ジレの定義とほぼ同じである。

さらに、友添秀則は彼の博士論文をまとめる形で出版した『体育の人間形成論』という著書の中で、国外の研究者がスポーツとは何かについて言及している箇所を抜き出して記しているので、それを以下に紹介する。

「スポーツとは遊びがルールに規制されて競争されたものである（カール・ディーム）」。「進歩への欲求に立ち、危険を冒しても先に進もうとする集中的な筋肉の努力に対する自発的で日常的な信仰である（ピエール・ド・クーベルタン）」。「スポーツとは身体的な技術を用いる活動である（G・リュッシェン）」。「スポーツとは身体的努力の発揮を協調す

る活動である（H・エドワーズ）」。「スポーツとは身体的卓越性を表す活動である（J・W・ロイ）」。「スポーツとは身体的卓越性をめざす人たちが示す、ルールによって伝承化されたひとつの形式である（P・ワイス）」。「スポーツの本質は競争だが、『競技（Athletics）』とは反対に、穏やかさや寛大さとともに楽しさの特徴をもつ（J・W・キーティング）」。「スポーツとは同意したルールの下で、身体的卓越性を相互に追及することである（W・P・フレイリー）」[11]。

以上の引用文の下線は筆者が付したものだが、ジレの主張とほぼ重なっていることが理解できる。基本となる用語は、遊び、競争、筋肉の努力、身体的な技術、身体的卓越性、楽しさである。

次に、スポーツとは何か、についての中村敏雄の説を紹介する。中村はスポーツの特徴を以下の８項目を挙げて捉えており、ジレ等の研究者より広がりのある見方を示している。(1) 身体的な訓練をふくむもの、(2) 勝敗のあるもの、(3) 精神的な訓練もふくんでいる、(4) やれば楽しい、(5) ルールがある、(6) 大きな（全国的、あるいは国際的な）組織をもっている、(7) フィクション性がある、(8) 近代的な合理主義思想をふくんでいる、である。中村は、フィクション性については「作り事」や「虚構」と同義であり、スポーツの試合での勝敗が日常生活での損得にはつながらないことを示し、また、近代的な合理主義思想については、「一つは人間をたいせつにする」ことであり、ルールで反則の罰則を設けていることがその例だとし、二つ目は「いちばん強いものをいちばん強いとみとめようとするもの」であり、日本の武道に見られるような名人という名称がないことだと説明している[12]。

中村の定義には組織と近代的な合理主義思想が含まれており、この点はジレらの定義と異なるものであり、以下に見るグットマンの視点と関連している。フィクション性とは次章で説明する通り、遊戯（遊び）の性格に含まれるものである。

最後に、アレン・グートマン（本人がグットマンが正しい発音だとしているので、以後はグットマンとする）の説を紹介するが、その後の研究者の多くが言及することになった極めて有名な説である。グットマンは、中世のスポーツと対照して「現代スポーツの明確な特質を七項目あげることができる」として、世俗化、競争の機会と条件の平等化、役割の専門化、合理化、官僚的組織化、数量化、記録万能主義を示した[13]。

この中で世俗化と合理化については、若干の説明が必要だろう。世俗化とは宗教的儀式ないし祭日との関係が断ち切られたことであり、合理化とはスポーツが組織化されたルールによって規制され、そのルールの内容は合目的性をもっており、「ルールは文化的人工的所産であり、神の啓示ではない」[14]ということであった。

ここで重要なのは、グットマンが現代スポーツの特徴を社会的な観点から捉えていることであった。

このように、スポーツとは何かについての研究は膨大にあるわけだが、その多くの研究を検討してみると、ジレの主張に代表されるように、スポーツの構成要素について追究する研究が数多くあり、また中村やグットマンのように、もう少し広くスポーツを社会的な観点から捉える研究も多く認められる。

以上の先行研究で提示されたスポーツの構成要素、現代的特質を踏まえて、以下では「遊戯（遊び）」「闘争（競争）」「身体運動」の項目のもとに、他の構成要素の関連づけを意識しつつ検討してゆきたい。

## 2-2.「遊び」とは何かの研究

先述したホイジンガの『ホモ・ルーデンス』は遊びに関する古典的な名著である。ホイジンガには『ホモ・ルーデンス』の他に『中世の秋』という著名な著作もあり、彼はオランダを代表する文化史家である。ホモ・ルーデンスとは「遊ぶ人」を意味しており、ホイジンガは文化現象としての遊びを様々な角度から検討している。

ホイジンガは、「遊びを、生物学的にも論理的にも完全に定義することはできない生命体の一つの機能」とした上で、「問題を制限して、遊びの主要特徴を述べなければならない」[15]として、以下3点でそれを明記している。

「すべての遊びは、まず第一に、何にもまして一つの自由な行動である。」強制されてする遊びは遊びではない。第二の特徴は、「『日常生活』とは別のあるものとして、遊びは『日常の』あるいは『本来の』生ではない」ということである。「遊びは必要や欲望の直接的満足という過程の外にある。」さらに、「遊びは日常生活から、その場と持続時間とによって区別される。完結性と限定性が遊びの第三の特徴を形づくる。」[16]。ホイジンガは、遊びを日常生活からは離れた場所と時間における自由な行動と見ている点で、先に中村が指摘した「フィクション性（虚構）」を含意している。

最終的にホイジンガは、これらの主張をまとめて以下のように遊びを定義している。

> 遊びとは、あるはっきり定められた時間、空間の範囲内で行なわれる自発的な行為もしくは活動である。それは自発的に受け入れられた規則に従っている。その規則はいったん受け入れられた以上は絶対的拘束力をもっている。遊びの目的は行為そのもののなかにある。それは緊張と歓びの感情を伴い、またこれは「日常生活」とは「別のもの」という意識に裏づけられている[17]。

以上の定義を逐一説明する必要はないだろうが、筆者が改めて注目するのは「遊びの目的は行為そのもののなかにある」とする記述である。これは一般に言う「自己目的的活動」のことである。

もう一人、『遊びと人間』（1958年）を著した著名な哲学者、文芸評論家のロジェ・カイヨワの説を紹介する。カイヨワは次のように遊びを定義している。(1) 自由な活動、(2) 分離した活動、(3) 不確定な活動、(4) 非生産的な活動、(5) ルールある活動、(6) 虚構的活動、と[18]。

カイヨワはホイジンガの『ホモ・ルーデンス』に刺激されて『遊びと人間』を著したとされているように、遊びの定義はホイジンガの定義とほぼ重なっている。説明は不要であろうが、不確定な活動についてだけ、著者の説明で補っておくと、「或る程度の自由が遊び人のイニシャティヴに委ねられるから、あらかじめ成行きがわかっていたり、結果が得られたりすることはない。」[19]という意味である。

カイヨワの『遊びと人間』の独自な特徴は、遊びの分類をしたところにある。カイヨワは、「さまざまな可能性を検討した後で、私は、その目的を達成するため、競争、偶然、模擬、眩暈（めまい）の四つの役割のどれが優勢であるかによって、遊びを四つの主要項目に区分することを提案しようと思う。」と記して、それぞれに「アゴーン Agon」（競技を意味する）、「アレア Alea」（サイコロ遊びを意味する）、「ミミクリー Mimicry」（物真似を意味する）、「イリンクス Ilinx」（渦巻きを意味する）という名称を与えた[20]。

さらに4つの主要項目は「一種の無制限の気紛れが表現される部分」である「パイディア Paidia」（子どもらしさを意味する）を一方の極とし、「この気紛れな性質を、絶対的、

命令的で、故意に窮屈な結果に従わせ」るが、「結果が完全に無用であることは変わらない」とする他方の極に「ルドゥス Ludus」（遊び、気晴らしを意味する）が位置づけられる[21]。そして、ルドゥスは「遊びの中では最も強い文化的な意義と創造性とを持つ要素である」[22]とされている。

カイヨワの遊びの分類表によれば、「スポーツ競技一般」がアゴーンのルドゥスの極に位置づけられ、その中で対戦する競技がよりルドゥスの要因が強く表れるものとされている。スキーや登山はイリンクスのルドゥスの極に位置づけられている[23]。

以上、ホイジンガ『ホモ・ルーデンス』とカイヨワ『遊びと人間』から遊びの定義について要約を試みてきたが、カイヨワの「遊びの分類」でのスポーツの位置づけについては一考の余地があるものの、遊びの定義については大凡了解できるだろう。スポーツの構成要素である「遊戯＝遊び」は、以上のような特徴をもった現象として理解できるのである[24]。

### 2-3.「競争」と「卓越性」に関する議論

「卓越性」の主張は、競争についての肯定的な見解と否定的な見解との対立の中に認められる。例えば、シェリル・ベルクマン・ドゥルーは「競争の本性には卓越性の追求における共同の努力が含意されている」[25]として、他者との比較における自らの能力向上を意味する卓越性について以下のように記している。

> 人が自らの技能や能力を評価しうるのは、自分自身以外の何かとの比較を通じてのみである。また人が自らの潜在能力を現実化しうるのは、その「何か」と継続的に「共同に努力する」ことによってのみである。対戦相手と技能や能力を比較することによって、動機づけの作用が与えられる[26]。

この文章には卓越性という用語は見られないが、「競争を卓越性追求における共同の努力」[27]として競争の意義を語っているのである。

またロバート・サイモンも、「スポーツの競争はゼロサム・ゲームではなく、挑戦を通した卓越性への相互追求とみなされるべきであるし、またそうした形で行われるべきものである」[28]と記し、卓越性を追求する競争の意義を強調している。

以上の見解に対して、ドゥルー前掲書の訳者でもある川谷茂樹は、彼の著書の「第２講義　スポーツマンシップについて（2）――卓越性、強さ、勝利――」の中で、「卓越性追求における共同の努力」（ドゥルー）や「卓越性への相互追求」（サイモン）を重視する「卓越性理論」（川谷が付けた名称）を以下のように批判している。

> 卓越性とは、平たく言えば、強さということです。（中略）「強さ」が試合の勝敗によって決定されるという思想こそが、スポーツの根本的な思想です[29]。
> いずれにせよ、卓越性＝強さの追求と勝利の追求は不可分離です。これを別々に追求しうると考えた点に、卓越性理論の根本的欠陥があります。（中略）私は前回から、勝利だけが競技者が追求すべき価値であると言い続けています[30]。

川谷の考え方は簡潔であり、卓越性の追求は勝利の追求だということである。この観点から川谷は、「松井秀喜選手が五連続敬遠された結果負けてしまった星陵高校は、チーム全体としての得点能力（相手の得点を防ぐ能力）の卓越性において、明徳義塾高校よりも

劣っていたと言わざるをえない」[31]としているが、当然議論のあるところであろう。

筆者はこの見解に賛成できないが、ルール上は批判されるべきものではない。また、この問題はこれまでずっと議論されてきたことで、もちろん決着は付いていない。この問題は、卑怯で姑息な戦術なのか、相手の弱点を突く効果的な戦術なのか、という観点では結論を見ないであろう。

また、「競争を卓越性追求における共同の努力」と見るドゥルーらの見解についても、筆者は「共同の努力」には同意できるが、競争と卓越性の考え方には疑問を感じているので、川谷の見解も含めて、この問題については次節で論ずることにする。

### 2-4. 競技としての「身体運動」を重視する理由

さて、スポーツの定義づけの要素として自明すぎて、一番捉えどころのないものが身体運動だろう。身体運動は、行われる場がグラウンド、アリーナ等の人工物であるのか、山、海等の自然（とは言え、登山道は整備されているし、スキー場も整備されているので、人工的な自然というのが打倒である）であるのか、による違いがあるにせよ、スポーツにとって身体運動は必須のものである。

ところで、スポーツの構成要素として競争ではなく「競技」を位置づければ、すなわち競技を技術を競い合うという意味に解すれば、チームスポーツも自然に挑戦する登山やスキーも競技であることに変わりない。つまり、スポーツの行為に目を向けたときに、そこにはルールに条件づけられた競技の世界が、例えばチームスポーツにおいては限定された時空間で得点獲得に向けての攻防の技術・戦術的世界が存在するのである。

既述の先行研究では競争をスポーツの構成要素としていたが、競争はあくまでアスリート同士の争いを意味しており、過度に勝利を追い求める要因ともなり得るものである。それ故筆者は、スポーツの本質を追究するとき、競争ではなく競技をスポーツの構成要素とすべきであると考えるのである。

そう考えると、技術を競う競技の世界では、チームスポーツに限らず、あらゆるスポーツでアスリート、監督・コーチ、情報収集や運営面でのスタッフによる「共同の努力」なくしては成り立たないことが理解できる。1つのゲームでの勝敗は、一時の目標、通過点であって、また技術を競うための手段、媒介であり、他方、技術を競うことは現役でいる限り永遠に続くのである。

もちろんスポーツ愛好者であっても、初めは勝敗に拘ることなく楽しみとしてスポーツに興じていても、そのスポーツ種目に打ち込みはじめると、競技会に出場して記録を追求し、また勝利を求めるようになっていく。その意味では、スポーツの競技の世界は一般のスポーツ愛好者からトップアスリートまでのグラデーションであり、競技としての身体運動は一貫していると言えよう。

なお、遊びもスポーツの重要な要素であるが、遊びはテレビゲーム、遊園地等の子どもの遊びからトランプ、花札、ルーレット、そして各種スポーツまで幅広く、スポーツの範疇を超えており、スポーツだけの要素ではない。もちろん、スポーツに遊びの要素があるからこそ、建築や製品製造などの労働や染め物、陶磁等の工芸とは異なるものとなるから、遊びの要素が重要であることは間違いない。また、スポーツの要素に遊びがあるからこそ、美術や音楽等の芸術とも異なることになるのである。

ただし、プロの選手を筆頭にトップアスリートの競技世界は、ホイジンガやカイヨワが示した自由で非生産的で自己目的的な遊びの要素を喪失して、真面目な苦闘の場となっている面も否めない。「スポーツは遊びの領域から去ってゆく」としたホイジンガの懸念は

現実的なものである。これは、アスリートがスポーツを競争の場として勝利をめざせばめざすほど、スポーツは真面目な苦闘の場とならざるを得ないことを示している。ただし、アスリートが苦闘の先に飛躍という感動の瞬間が訪れることを期待して努力する姿に、人びとが感動を覚えることも事実であり、これはこれで誇れることだと思う。遊びの要素は薄いにしても競技の世界にひたむきであることは、アスリートとして立派である。これを苦楽の弁証法とする研究者もいる[32]。

## 3. スポーツは何を表現する文化か

前章では、スポーツとは何かについて、行為（プレー）としてのスポーツの構成要素という視点から先行研究を紹介、検討してきた。ジレに代表されるように、スポーツは闘争（競争）、遊戯（遊び）、激しい肉体活動の３つの構成要素で捉えられ、中村やグットマンは現代社会の中でのスポーツの特徴を提示した。そして、ジレの定義にある遊び、競争、身体運動について先行研究をもとに、それぞれの概念の整理を試みた。遊びについてはホイジンガとカイヨワの説から説明を加え、競争については卓越性の追求という視点から、ドゥルーとサイモンの説、それに批判的な川谷の説を対峙させて検討し、身体運動については技術を競う競技と遊びを実体化する媒体として重要なものだと指摘した。

以下本章では、上述した検討内容を前提としつつも、別に新たな視点として、スポーツは何を表現する文化なのかという課題を追究していきたい。何故こういう視点を設けてスポーツの本質究明をしようとするのかについて、まずは筆者の意図するところを説明したいと思う。この課題は、スポーツの本質は何かと問われたとき、アスリートがその行為において何を創造しているのか、つまり表現された行為（作品）がどのような特質を備えているのかを明らかにすることである。

筆者は、この課題解決に当たり、学問的にスポーツ研究に先んじる美学のこれまでに積み重ねられてきた成果に学ぶことが必要だと考えている。美学の考え方がスポーツの本質究明においても大変参考になるからである。両者の表現の目的と方法に違いはあれども、表現を必須とする文化であることに変わりはないのである。

竹内敏雄は、「芸術が本質的に美的価値の創造を目的として追求する」[33]ものだとして、芸術の本質についての考え方を示している。

また、永井潔はその著作の中で、「芸術は具体的な形象をつくる創造活動です。それはしかし、実用的な実物をつくるのではなく、虚構物（フィクション）とよばれる一種の模造物をつくる仕事です。それはにせの現実であり、現実の模造です。その内容は人間の意識がとらえた世界の姿だと思います」[34]と記している。

竹内は芸術の本質は美的価値の創造だと述べ、永井は現実の模造物の創造だとしているが、今ここではそのことは問題にしない。「創造」という観点が重要なのである。

創造という観点のもとでスポーツの本質を追究しようとするとき、伊藤高弘のスポーツの定義は重要である。伊藤はスポーツの本質を「身体運動の制御・表現」であると定義している[35]ように、制御・表現という用語を用いてスポーツの本質を表そうとしているのである。表現することは何らかの作品を創造することであるから、「身体運動の制御・表現」においても身体運動によって何らかの作品が創造されると理解できるだろう。

まずは、「身体運動の制御」について確認しておくと、「今日の陸上競技では、筋力、循環機能などエネルギー源と効率を高める制御能力が求められる」[36]と伊藤が指摘しているように、近年の運動生理学の研究では、身体運動は筋肉を動かすエネルギー供給系と脳に

よって運動を統制する制御系の相互作用のもとで行われることを明らかにしている。つまり、身体運動におけるエネルギー供給系はATP-CP系、解糖系、有酸素系の3つがあり、それぞれの代謝機構が必要に応じて働き、身体運動における制御系は脳−神経系、筋肉−骨格系、環境系の3つがあり、それぞれが協調して運動を制御しているのである。この分野は運動科学系の研究成果に学ぶ必要があり、ここではこれ以上深めることはできない。

さて、本題となる「身体運動の表現」についてであるが、筆者は「表現」の中身を「巧みな動き」だと考えている。既述の「競争と卓越性に関する議論」の章で言及したように、スポーツの本質を「卓越性の追求」とする先行研究がかなり優勢を占めていたのだが、スポーツの行為形態を客観的に捉えようとするならば、筆者は卓越性ではなく巧み動きによる概念把握が必要だと考える。何故なら、卓越性は「対戦相手と技能や能力を比較すること」によって優越性を得ようとする主体の側の意識を表すものであり、他方、巧みな動きは、競技の世界にいるかぎり継続的に技術向上を追求するアスリートの行為を、その内容において客観的に捉えるものだからである。

## 4.「巧みな動き」とは何か

前章を受けて本章では、「巧みな動き」とは何かについて検討する。

筆者の手元にニコライ・ベルンシュタインが1940年代末には執筆していたが、スターリン体制のもとで出版できず、彼の死後の1991年になって出版された著書『デクスティリティ　巧みさとその発達』がある。ベルンシュタインは現代運動科学を基礎づけた科学者の一人である。ベルンシュタインはその著書の中で、巧みさについて以下の通り定義している。「巧みさとは、いかなる外的状況においても解決となる運動を見いだす能力、つまり生じた運動の問題を、以下の条件を満たして十分に解決する能力」であり、その条件とは「正しいこと（適切で正確）、すばやいこと（意志決定においても、結果の達成においても）、合理的であること（適宜性を備え、経済的）、資源を利用していること（咄嗟の機転が利いて、先見的）」である[37]。

簡潔に言えば、巧みさとは、運動課題を正確に、迅速に、合理的に、機転を利かして解決するアスリートの能力だということである。

さらにベルンシュタインは、巧みさの特徴について以下の3点で説明を加えている。

> まず始めに、おそらく最も重要なのは、運動の巧みさは普遍的で、万能な能力であるという点だ。（中略）巧みさの第二の魅力は、誰もがそれを手に入れられることである。（中略）巧みさの重要な特性の第三は、力強さや持久力などのような身体能力そのものではないという点である。巧みさは真の知性への架け橋となる。そもそも巧みさには知恵がある。（中略）この性質が、巧みさが他のすべての能力（力強さ、スピード、持久力―引用者註）を越える、次元が一つ上の能力であることを裏付けている[38]。

以上の説明から重要なことは、巧みさは誰もが獲得できる普遍的な能力であり、力強さ、スピード、持久力を越える次元の能力だということである。巧みさはスポーツ技能の中核を占めるものと言える。

さらに、巧みさに関わって、バイオメカニクスを専門とする山田憲政は、「巧みさ」という用語を使用してはいないが、スポーツの動きについて以下のように記している。

競技スポーツは人間の極限の活動であり、一瞬のスキも許されない究極の動きで競われる。この時の動きは力強くそして美しい。（中略）じつは超人だけが達成した個人的で特殊な技ではなく、誰もが到達可能な合理的な動きなのである。ただそこまで追求しない、あるいは到達への方法論が十分解明されていないだけである[39]。

つまり、山田の主張を筆者なりに言い換えれば、スポーツをスポーツたらしめるものが力強く美しいアスリートの動き、すなわち巧みな動きであり、その巧みな動きを支えているのが技術であって、ベルンシュタインも「巧みさの第二の魅力は、誰もがそれを手に入れられることである」と指摘しているように、巧みな動きを支える技術は特殊な人間にしか備わらないものではなく、種目固有の動きの学習法やトレーニング方法が解明されるならば、挑戦する意思のある誰もが到達可能なものなのである。

それでは以下に２つの事例を挙げて、巧みさの重要性について実践面から論じようと思う。

かつてラグビー日本代表として活躍した平尾剛は、パスをキャッチするタイミングとスペースを理解して実行する難しさについて次のような述懐をしている。それは、平尾が神戸製鋼時代に先輩格のCTB（センター）の元木由記雄から「おまえ、あのスペースが見えてへんのか？」と指摘されたことから始まる。

そこから私は、元木さんのパスをどうすればうまくキャッチできるかに工夫を凝らした。走り出しのタイミングを早める。パスを出すときの元木さんの癖を探る。サインプレーごとに微細なちがいがあるランニングコースを覚える。有効なスペースが生まれやすい情況を知るべく、試合の映像をくりかえし観る。そうしてしばらくしてパスがなめらかにつながるようになったとき、元木さんが口にした「あのスペース」が目の前に開けた[40]。

平尾は、「あのスペース」が目の前に開けるような巧みなプレーを実現するために、知的かつ身体的なトレーニングを繰り返すことの必要性を述べているのである。

もう１つの事例は、平尾が自著で引用している元陸上競技選手の為末大のインタビュー記事に見られる。

勝ち負けじゃないところにモチベーションがあったことが最後の支えになりました。どうやったら速く走れるか、という好奇心がモチベーションの半分でした[41]。

どうやったら速く走れるか、まさにベルンシュタインが強調するところの知恵を伴った巧みさの追求である。為末は速く走るために、「体の姿勢を真っ直ぐにすること」「力強く地面を踏みつけること」を特に重視していると述べている[42]。

以上のような研究者とアスリートの言説をもとに、筆者はスポーツの本質に関わって巧みさを重視するものである。

しかし、巧みさはあくまでアスリートの能力として、主体に属するものであって、客観的に捉えうるものでない。客観的に捉えうるのはアスリートが表現する行為そのものであるから、ここではアスリートが巧みさという能力を発揮して表現した行為形態に焦点を当てなければならない。すなわち、運動課題を正確に、迅速に、合理的に、機転を利かして解決する巧みな動きに、スポーツの本質が表れると筆者は考えるわけである。

巧みな動きとは、アスリートが自らの身体を制御し道具を操作してコートやグラウンドで表現する行為そのものであり、その行為を具体的に成り立たせているのが技術である。技術は運動課題の合目的的かつ合理的な解決方法を内包した行為の形態だと考える[43]から、技術にスポーツの本質が表れる。アスリートは技術を洗練させていくことが究極の目的であり、洗練された技術によって巧みな動きが生み出されるのである。

## 5. スポーツ価値論の検討

これまでの議論から、スポーツの本質とは、「遊び」と「競技」によって特徴づけられる「身体活動」において生じる運動課題を正確に、迅速に、合理的に、機転を利かして解決する巧みな動きだと結論づけてよいだろう。

このようにスポーツの本質を限定した上で、スポーツの価値とは何なのか、について究明することが次の課題、すなわち本稿の２つ目の中心課題となる。

スポーツの価値についての論文、著作も膨大にあるなかで、先行研究を簡潔に整理して持論を展開しているのが関朋昭の著書である。それ故、この関の著作の検討から始める。

関は、「価値とは、何かしらを基準として『善さ／よさ』といえるであろう」として議論を始め、その「何かしらを基準」を内在的価値と外在的価値の区別によって明確にしている中西純司の研究を検討している。関によれば、中西は、「あくまでもスポーツの『内在的価値』の『不易』を重要視し、スポーツの『外在的価値』は『流行』として副次的に取り入れながらバランス関係を維持・形成していくことの重要性」を説いており、「スポーツの固有の楽しみや喜びである『中核的スポーツ価値（内在的価値）』を尊重し、教育的価値などの『派生的スポーツ価値（外在的価値）』が個人や社会全体にも創出されるという、スポーツ価値のダイナミズムについて理解していくことが課題だ」としているのだという[44]。

本稿では、この中西論文を検討の対象としていくことになるが、その前に、関の中西論文批判を見ておきたい。

関は、スポーツに内在的価値と外在的価値、さらに言えばそもそも価値があるのかを問題とする。関は、「ある固定的な意義（価値）を有する『スポーツ（S）』、『スポーツ（A）』なるものが存在するのではなく、『スポーツ』によって『楽しみ』や『勝利』という意義（価値）が実現できるのである」という久保正秋の言説[45]、「100 メートルを 10 秒で走ろうが 9 秒で走ろうが、また球技でいくら得点を重ねようが、そのもつ社会的もしくは経済的な価値、つまりは二次的な付加価値をことごとく剝ぎ取ってしまえば、やはりそれは、ただそれだけのことであるにすぎません。」とする守能信次の言説[46]を、中西論文への反論として利用し、その上でどちらの主張にも論理的な限界があり、常に相即的であるから、論理が空虚にならないために「中庸的な命題を導き出す」必要があるとして、「スポーツは無価値であるがゆえに価値がある。」さらには「スポーツの価値は境界がないからこそ価値づけることができる。」と自説を展開する[47]。

こうした関の主張の根底には、「スポーツを評価するための価値基準は、『何のために役立つのか？』という手段的なものばかりであった」ことへの批判があり、「極論すれば、それ自体は何の役にも立たない無価値なものが文化なのである。」とする思想がある[48]。

関の主張にはもっともな部分もある。つまり、多くの先行研究がスポーツの価値を「何のために役立つのか」という役割期待を基準にして求めていることに関は批判的だったのであり、筆者もそうしたスポーツの手段的利用からスポーツの価値を見いだすことは誤り

であると考えている。スポーツはあくまで自己目的的な文化なのであるから。ただし、だからといってスポーツが無価値なものであるという関の主張には同意できない。関がスポーツは無価値なものとするのは、価値の基準を関自身が批判していた「何のために役立つのか」という役割期待に見ていることの表れではなかろうか。

さて、検討の対象として重要となる中西の研究であるが、まずは中西の論文「『文化としてのスポーツ』の価値」について検討していく。この論文で中西は、「『商業オリンピック』とも揶揄されるように、『スポーツ概念』や『スポーツの価値』から逸脱するような過度の政策化・商業化・メディア化などの路線、いわゆる『スポーツ手段論』へと独走していっていないか」という問題意識のもとに、改めて「『文化としてのスポーツ』の価値とは何かについて探究していくこと」が必要だとしている(49)。

そして中西は、文化としてのスポーツを構成する要素として、①「人生や世界の意味、及び求めるべき行動の目標を提示することに関わる『観念的成果』、②共同生活の秩序を保持し、社会的な行動を律する工夫としての『制度的（行動的）成果』、そして③生存を維持するために生理的な欲求を充足させ、自然に働きかける工夫としての『物質的成果』」を挙げ、「スポーツそれ自体の存在を意味づけ、その価値を明示し、人間と社会に対するスポーツの意義を定義することによって、その正当性」を意味づける①の観念的成果が、さらに２つに、すなわち「スポーツ手段論」と「スポーツ目的論」に分かれると説明する。つまり、「スポーツと特定の社会的諸課題（政治や経済、教育など）の解決を『目的―手段関係』と定位し、スポーツに対する価値（スポーツの外在的価値）実現の手段（道具）としてスポーツを正当化しようとする」スポーツ手段論と「スポーツという文化に内在する本質的かつ人間的価値（スポーツの内在的価値）を重要視し、スポーツ経験そのものが人間と社会にとって意味と価値を持ち、人間の欲求充足のための自己目的的な活動としてスポーツを意味づけようとする」スポーツ目的論に分かれると(50)。

そしてその上で、関も引用した中西の主張、すなわち「スポーツ目的論を『不易』としてあくまでも重視し、スポーツ手段論は『流行』として副次的・付随的に取り入れながら、２つのバランス関係を維持・形成していくことがきわめて重要性である」(51)という結論が導き出される。

上記の説明の後に、中西は、観念的成果であるスポーツ観、制度的成果であるスポーツ行動様式、物質的成果であるスポーツ物的事物の複合体としてスポーツをとらえ、そうしたスポーツの概念把握のもとに、「他の何かによっては補完できない、文化的な『学び』の内容（中西は「スポーツの文化性」と表現している―引用者註）を有しているからこそ価値がある」(52)とスポーツ独自の価値の根拠を説明している。

以上、中西のスポーツ価値論を詳細に検討してきたが、中西はスポーツの内在的価値について、カイヨワのプレイ論から着想を得た「自発的活動」「競争＝アゴン」「達成」「克服」「模倣＝ミミクリ」「運＝アレア」「めまい＝イリンクス」などの人間の根源的な欲求充足に伴う充実感・感動・楽しさ、面白さ、喜び、興奮、熱狂を挙げている(53)が、そのように規定した根拠についての説明はない。また、スポーツの外在的価値として、個人的価値、教育的価値、社会・生活向上価値、経済的価値、環境的価値、国際的価値、鑑賞的価値の７つに整理しているが、これらの外在的価値の実現は「期待したい」と記された通り不確実なものであり(54)、加えて内在的価値と外在的価値の関係の説明がない。

中西以外にもスポーツの内在的価値に言及している研究者にロバート・サイモンがいる。サイモンは「スポーツのすべての価値を支配的な社会の価値の表れとし、それを一般社会の価値に還元して説明しようとする」(55)還元主義者の考え方を批判し、スポーツの内在的

価値の独自性を強調する。サイモンもスポーツの内在的価値を厳密に定義していないが、以下の文章には彼の考え方が表れている。

> スポーツが適切に行われれば、恒久的な人間的意味という価値が提供されると述べてきた。スポーツを通じて、逆境に打ち勝ったり、卓越性を正しく評価することが学べる。スポーツが提供する外在的な報酬の他に、活動そのものを評価したり、たとえ対戦相手であっても、彼らの貢献度を評価することも学べる。スポーツを通じて、道徳的な美徳も悪徳も表し、育むことができるし、専心、高潔、フェアネス、勇敢といった価値の重要性を実証することもできる(56)。

明確には言えないが、サイモンはスポーツの内在的価値として、卓越性、善、規律、専心、高潔、フェアネス、勇敢などを意図しているようである(57)。

スポーツ価値論を内在的価値と外在的価値に分けて詳細に検討した中西とサイモンの研究から、我々の今後の研究課題が見えてくる。それは、スポーツの価値を定義する場合の「価値」それ自体の定義が必要だということ、価値の定義に基づいてスポーツの価値を筆者なりに定義すること、それとの関連で中西のいうスポーツの外在的価値をスポーツの価値に含めてよいのか検討することである。

## 6.「価値」とは何か

本章では、スポーツの価値の究明のために、「価値とは何か」について検討し、本稿に関係するかぎりでの定義を確認したい。既述の通り、スポーツの価値については様々な定義があり、混迷しているからである。

ここで筆者が検討したいのは社会学の両巨頭である見田宗介の『価値意識の理論』と作田啓一の『価値の社会学』である。両書とも極めて論理的で詳細な研究書である故、筆者が全体を把握して解説することは難しい。ここでは行論において必要な箇所を抜粋して示し、簡単な追加説明を付すに留めざるを得ない。

見田は、価値意識についてパーソナリティ論、文化の理論、社会の理論の三層よりなる階層構造において克明に分析、検討するにあたり、価値と価値意識について定義している。見田は「価値の概念」の項で、価値を以下のように定義する。

> 価値を「主体の欲求をみたす、客体の性能」と定義する。なお、(a) その一般的な機能は、意識的行為における選択の基準となることである。また (b) それは元来、人びとの選択的行為から推論された構成概念である(58)。

しかし、このままでは誤解の余地があるとして、見田は、(1)「主体」とは個人または集団であり、(2)「欲求」とは道徳的・芸術的・社会的欲求をふくむあらゆる分野で「のぞましい」ものを意味し、(3)「みたす」とは直接の欲求のみならず欲求をみたす手段や条件として「のぞまれる」ものを対象とし、(4)「客体」とは価値判断の対象となりうる一切のもの、つまり実在的・非実在的な物体・状態・事件、行為・人間・社会集団、衝動・観念・思想体系などであり、(5) 価値の現実的な基盤を「人びとの欲求」と関係づけるのであり、(6) 同時に、価値を人間の意識とは独立に「対象に内在するもの」とする価値の定義にも反対し、(7) 価値が客体の側にあることを明示することによって、現代の価

値理論が陥っている混同から決別するのだと補足説明している。そして、価値に対応する主体の側の要因は「価値意識」として、価値そのものから概念上区別されるとしている[59]。

見田によれば、「価値」とは客体の側、すなわち人間が欲求をみたすために行ったり考え出したりした行為や思想などを意味し、「価値意識」はあくまでも主体である人間の意識だとされる。そして、価値を人間の意識から独立した「対象に内在するもの」という理解を拒否する。

さらに、見田は「価値は、本来人びとの欲求に由来する、主観的属性である。」「『価値』は人間の評価によって付与される（ただし、必ずしも個々の行為における個々の主体によってではなく、多くのばあい、価値判断の主体として社会集団によって、『歴史的』に付与されている）。」[60]とも記している。

見田の説明で理解が難しいのは、価値が客体の性能でありつつ主観的属性であるという点である。しかし、見田の続く説明を考慮すると、「主観的属性」とは、その時々の個々人の意識というのでなく社会集団によって歴史的に培われてきたもの、すなわち観念や思想体系を意味すると理解できるであろう。

見田の価値の定義をもとにスポーツの価値について考えるとき、スポーツという行為のうちに価値が創造されるのであり、スポーツを行う人間の意識ではないということである。後者はアスリートの価値意識である。

次に作田の説を紹介するが、作田の『価値の社会学』は 1972 年に出版されたものであり、見田の『価値意識の理論』の出版が 1966 年であったから、見田の著作から 7 年経ったときに世に問われたものであり、当然にも見田の著作は検討対象となっていた。

作田がなぜ価値に着目したのか、まずは作田の課題意識を以下に示す。

> 現在の課題というのは、文化によって規制された欲求を出発点において、文化と行動、更には文化と社会（行動の相互作用としての）との関連を一貫的に追求することである。このような課題に答えるために、文化の共通部分としての価値（value）に焦点を合わせることにしよう[61]。

作田は人間の生活が文化と呼ばれる行動様式によって営まれていることに注目して、その共通部分としての価値の究明へと向かうのである。その上で、作田は価値を以下のように定義する。

> 価値とは、何らかの犠牲（または排除）を伴う選択の上で、到達あるいは入手に値する、とみなされている客体のことである。行為者にそのように「みなされ」なければ、同一の客体でも価値はないから、価値は、そのようにみなす志向とともに成立する。価値は志向の客体であり、同時に客体への志向でもある。見田宗介はこの志向の側面をさして特に価値意識と呼ぶ[62]。

作田も見田と同様に、価値は主体（人間）の志向の客体であるとしている。ただし作田は、価値と価値意識は論理的には同時に成立するのであって、価値客体から価値意識が出てくるのではないし、その逆でもなく、両者は分析上の位置の違いにもかかわらず同一であるため、便宜上、意識と客体の両方にまたがる用語として、価値という言葉を利用する[63]としており、この点は見田と微妙に異なる。しかし、見田も主要には価値意識の研

究に重点を置いていたので、両者にとって重要な研究課題は、客体としての価値が個人や集団にどのように内面化されていくのか、にあったのである。

さらに作田は、価値の選択においては犠牲もしくは排除を伴うとしているが、これについてはジンメルの説に倣って「客体への到達が何らかの困難を伴わない場合には、まだ価値は発生しない」(64)とも記しており、欲求を充足させるものが価値であるという考え方を退けている点が重要である。そして、作田は価値の選択において犠牲が伴うことの一例として登山を取り上げている。「登山家にとっては、山は高く険しくなければならない。失敗はその頻度のある範囲内においてではあるが、効果の法則（law of effect）に反して、人をますます強く目標到達に向かってかり立てる。」(65)と。本稿との関係で筆者はこの例示を重視したい。作田は明らかに自身の価値論の論述において芸術などともに登山を対象としていたのである。

この点に関わって作田の別の論述を以下に示す。作田は、文化の下属体系として４つの分類、すなわち「経験的知識の体系」「世界観の体系」「秩序の体系」「表現様式の体系」を示しているが、第４の「表現様式は、好み、センス、品、適合（congeniality）、美、感覚的な受容の容易さや困難さを表わす用語で指示されるような内容をもつ。一つの時代の一つの社会において（あるいはその内部の部分、たとえば階級において）、その成員にある程度共通した表現様式の体系がある。」とし、表現様式が社会の中で制度化されるときの代表的な文化項目の例として「芸術」を挙げている(66)。

二人の著作を検討してわかることは、作田が登山を例示として取り上げた以外は、見田も作田もスポーツについては一切及していないことである。しかも、作田の著作の「あとがき」には、価値は選択過程から生じ、その選択の原理は「現実原則の支配する世界、普遍の理念が貫徹する仮構の世界、現実と理念の拘束から離れた自由あるいは遊びの世界に根ざしている」が、「第三の自由あるいは遊びの世界から、価値がどのように形成されるかという問題は、本書ではまったく考慮の外におかれている」とも記されているのである(67)。

作田は「第二の理念の世界から生ずる文化的価値の現実とのかかり合いを考察してみた」(68)としているが、登山が事例として扱われていたこと考慮すると、そして文化の下属体系としての表現様式の体系説明を考慮するとき、スポーツも文化的価値の範疇に入っていると理解してよいように思われる。また、これまでの論述でスポーツの構成要素として遊びが位置づくことを考えると、第３の遊びの世界の対象であるとも理解できる。

この点については作田の別の著作で明らかとなる。『価値の社会学』出版以前に書かれた評論をもって編集された『恥の文化再考』所収の評論「高校野球と精神主義」には、スポーツの特質について次のような記述がある。

> しかし野球で人格が磨かれるであろうか。慶応大学の前田監督は、この点についてはっきりした意見をもっている。野球は楽しみのためだけにある。それは人格の鍛錬にもならないし、過度の練習は学業とも両立しない（中略）。楽しみを何かほかの目的の名において合理化することを拒絶する前田監督の意見に、私は賛成である(69)。

明らかに作田はスポーツを自由あるいは遊びの世界に位置づくものとみなしており、また「本当の技術を磨いてそれを表現する楽しみ」(70)を野球に見出していることから、文化の第４の下属体系に位置づく表現様式に属するものと考えているようである。作田の視野にはスポーツが確実に入っていた。

以下では、見田と作田の価値論に学びつつ、スポーツの価値に関する先行研究の検討結果を踏まえて、スポーツの価値とは何かについて筆者の見解を示していきたい。

7. スポーツの価値とは何か

前章で見たように見田と作田の言説に学ぶならば、価値は人びとが欲求をみたすために行ったり考え出したりした行為や思想などの客体の性能、別言すれば主観的属性であり、人びとの犠牲や困難を伴う歴史的な選択行為から生み出されてくるものであった。そして、価値は個々人の主観である価値意識とは区別されていた。

スポーツは行為の文化であるから、行為の中で価値は創造される。スポーツをする行為者、すなわち、これまでのアスリートたちが洗練させてきた巧みな動きの中で価値は創造されるのであって、個々のアスリートの主観や気分に価値があるのではない。それはアスリートの価値意識である。

既述のように中西は、スポーツの内在的価値として人間の根源的な欲求充足に伴う充実感・感動・楽しさ、面白さ、喜び、興奮、熱狂を挙げていたが、これらはスポーツをするアスリートの価値意識であろう。あくまで客体としてのスポーツの行為のうちに創造されるものが価値であるから、アスリートがその時に感じた意識や気分であってはならないだろう。

また、サイモンはスポーツの内在的価値として、卓越性、善、規律、専心、高潔、フェアネス、勇敢などを意図していた。卓越性も善も高潔もフェアネスも独立した観念であって価値となるものである。ただし、それらがスポーツの価値として妥当であるかが問われねばならない。

既述の卓越性理論の検討では、卓越性はアスリートが対戦相手と競い合って勝利を得ようとする意識と能力であった。卓越性は、アスリートにとって自分もしくはチームの活力を維持していく上で重要なものであろうが、それは巧みな動きを習得した結果として実現するものであって、客体の性能としての価値ではない。

善、高潔は人間の行動にとって重要な価値だが、善も高潔も道徳的な価値であり、社会的な規範でもあり、日常から区別された虚構の世界での自己目的的な活動であるスポーツの価値としては打倒しないだろう(71)。

フェアネスについては、次に見るようにスポーツの価値としてふさわしいと考える。

規律は、見田の説に従えば、行為規範として信念体系に属するものである(72)。専心や勇敢は価値として扱う必要はないであろう。例えば、努力、熱心、集中などもすべて価値として扱うことになり、何でもかんでも価値とされてしまう。

筆者はスポーツの巧みな行為の内に創造される価値を、「巧み」「美」「公正（フェアネス）」「快（フロー）」だと考えている。以下、その各々について簡潔に説明したいと思うが、その前に、これらの概念をもってスポーツ固有の価値のすべてが尽くされると断定できないことを、正直に記しておかねばならない。さらなる検討が必要である。

さて、巧みさについてのベルンシュタインの説明からすれば、巧みさはアスリートという主体の能力であったから、価値とすることはできない。アスリートたちが巧みさを駆使して優れたパフォーマンスを発揮する中に「巧み」が表れるのである。「巧みさ」は能力であり、「巧み」は行為に表れたものである。既述の見田の「価値の類型表」には記されていない「巧―拙」は、おそらく「＜現在＞中心」で「＜社会＞本意」の価値に位置づけられるだろう。

「美」については拙稿「スポーツ技術美試論」で検討し、以下のような結論に至った。

すなわち、「不断の努力を積み重ねてきたアスリートたちのパフォーマンスには共通した普遍的な技術（行為の形態）が見いだせるのであり、そのパフォーマンスの質を決めるのがスポーツ技術の水準である。スポーツ技術（戦術も含めて）とは、スポーツ課題の合目的的かつ合理的な解決の仕方が内包された行為の形態だと規定できるが、こうした行為の形態であるスポーツ技術にこそ美が表れるのであり、高度な技能を有するアスリートの行為には洗練された美が表れるのである。これを我々はスポーツ技術美と称する」(73)と。

「公正（フェアネス）」はアスリートがフェアにプレーすることであり、そしてルールで規定されている行為の形態そのものが公正（フェアネス）だということである。陸上競技のスタートとゴールは決まっているし、サッカー等の球技では得点形式は決まっていて、それを逸脱することはできない。アスリートはフェアプレーに徹しない限り巧みさを競い合い、巧みな動きを生み出すことは不可能となる。したがって、公正（フェアネス）は巧みな動きを生み出すための条件であり前提となる。

「快（フロー）」については、筆者の考えでは、その時々のアスリート個々の感情ではなく、多くのアスリートが競技の中で経験している感覚であり、スポーツの行為中に表れるもの、例えば長距離走の中での「ランニングハイ」、テニスやバドミントンに見られる「ゾーン」のごときものである。これは、ミハイ・チクセントミハイの定義では「フロー」ということになる。チクセントミハイはフローについて以下のように説明する。

> 我々はこの特異でダイナミックな状態―全人的に行為に没入している時に人が感じる包括的感覚―をフロー（flow）と呼ぶことにする。フローの状態にある時、行為は行為者の意識的な仲介の必要がないかのように、内的な論理に従って次々に進んでいく(74)。

また、アーティストの大山エンリコイサムはフローの感覚を「無時間化した内的感覚の現象」だとして、バスケットボールでのチームの司令塔であるポイントガードの動きを例にとって以下のような具体的な説明をしている。

> フローの感覚は、この俯瞰する視点（ポイントガードがボールをキープして全体の状況を見渡す状況―引用者註）を放棄し、たたみかけるように一気に状況へと切り込む瞬間に立ち上がる。（中略）オフェンス、ボール、ディフェンスの運動が、相互作用し、ドライブを創出する。ジグザグに身体を切り返し、ブロックしようと上から被さる相手の身体をくぐり抜け、ボールを滑らかにリングへと運ぶモーション―(75)。

チクセントミハイのいうフローの状態も大山の説明するフローの感覚も、一般にゾーンと言われることと同義であるが、これをアスリート個々人の快意識とするのでなく、多くのアスリートが体感する「共通感覚」と理解すべきであり、そして競技者の巧みな動きとともに立ち現れるものであり、作田のいう主観的属性を意味していると考えられる。

以上の検討を踏まえるならば、スポーツの価値を創造するためには、近所の路上を走ったり広場で体操をしたりするだけで満足できるものでなく、サッカーピッチ、野球場、アリーナ等の改修・新設と開放が必要であり、資格のある指導者が指導に当たる必要があるということである。

最後に、中西がスポーツの外在的価値として挙げた７つの価値、すなわち個人的価値、教育的価値、社会・生活向上価値、経済的価値、環境的価値、国際的価値、鑑賞的価値に

ついてであるが、これまでの議論からすれば、これらはスポーツの価値とは言えない。ここで使われている価値は、役割とか重要性とか貢献などの用語で置き換えられるものであり、筆者は、これらの事例を「役割期待」という用語で説明すべきだと考えている。

また周知の通り、スポーツを行うことで、その役割が確実に果たせるわけではない。逆に、経済的効果をねらってスポーツが悪用されたり、オリンピックや国際大会の競技場整備のために自然環境が破壊されたりする事例は、世界中で数々起こっていることを理解せねばならない。

つまり、スポーツをどう活用するかが重要であり、その際は本稿で議論してきたスポーツの本質と価値の創造を中心に据えて活用すべきである。例えば、学校体育ではスポーツを教材として教育を展開しているが、スポーツ種目の個々の巧みな動きを教授・学習するとともに、そのための学習集団づくりを重視し、授業を通じて受講生たちのコミュニケーションの取り方や学習方法の共有など、異質共同の学びを実現していくことが重要である。また、市民の健康や地域の活性化にスポーツを役立てようとするならば、スポーツの価値創造を重視し、その上で市民の栄養・睡眠、暮らし、労働条件、住環境等の条件を満たすことと連動しなければ意味をもたないだろう。

## 残された課題――スポーツ価値研究を進めるために

スポーツの価値は、アリーナ、グラウンド、自然（ゲレンデや山、海）おいて行われる練習や試合など、つまりスポーツのプレー場面で創造され、それが他の文化とは異なるスポーツの独自性であった。このことを本論では詳述したのである。

しかし、プレー場面はそれ自体で完結することはできず、スポーツ組織（サークル・クラブ・連盟など）、スポーツ制度（スポーツ施設、国立スポーツ科学センター等のトレーニング・研究機構、スポーツ基本法等の関連法規など）および社会経済的土台（社会インフラ、労働環境、賃金、余暇時間など）を基盤として成立するのである[76]。

とりわけ、スポーツ組織の役割は重要である。スポーツ組織は、練習場所の確保、練習日や競技会参加の日程調整や準備を進め、会員相互の連絡のための通信やチラシを作成・配布し、さらに会員拡大を進めるなどの活動が必要であるが、各地方のクラブを束ねる地方連盟や、さらにそれらを束ねる全国協会や全国連盟は、国民の権利としてのスポーツを実現するために、スポーツ施設の改修や新設を地方自治体や国に要求し、各地方や国のスポーツ政策・行財政計画の立案・実施に加わることも重要となる。

さらに、スポーツ組織には日本体育・スポーツ・健康学会を始めとする研究団体も含めて考える必要があり、研究団体および研究者個人がスポーツに関わる問題について研究し、時に提言をまとめる必要もあり、地方自治体や国のスポーツ政策立案に関与していくことが求められる。

当然のことながら、地方自治体や国のスポーツ政策立案にあたっては、教育、医療、地域づくり、自然環境保護などの課題と連動するのだから、それらの分野の専門家との共同での対応が必要である。

以上の諸点はスポーツの価値創造を保証し、かつ前提となる条件であった。

最後に、スポーツ価値研究を今後進めていく上で課題となる事項を記して本稿を閉じたい。

見田宗介は「個々の主体の、多くの客体にたいする、明示的もしくは黙示的な価値判断の総体によって、その主体の〈価値意識〉が構成される。また逆に個々の客体が、多くの

主体によって下される、明示的もしくは黙示的な価値判断の総体によって、その客体の〈社会的価値〉が構成される」(77)と示しているが、この視点に立つならば、本稿で追究してきたスポーツの価値、中西の捉え方ではスポーツの内在的価値がどのように個人に内面化されていくのか、またどのように集団に受け入れられて社会的価値となるのか、について追究する必要がある。今後、具体的に対象を定めて実証的な研究を進めていかねばならない。我々の研究課題として残されている。

註および引用文献


（1）拙稿「スポーツ技術美試論――中井正一の美学に学ぶ――」、『武蔵野美術大学研究紀要』第54号、2023年。
（2）ホイジンガ著、高橋英夫訳『ホモ・ルーデンス』中公文庫、1986年、400ページ。
（3）同上書、399ページ。
（4）多木浩二『スポーツを考える――身体・資本・ナショナリズム』ちくま新書、2021年、138-139ページ。
（5）同上書、155ページ。
（6）平尾剛『スポーツ3.0』ミシマ社、2023年、114-115ページ。
（7）同上書の13節「『競争主義』と『勝利至上主義』はちがう」を参照。
（8）岡田桂・山口理恵子・稲葉佳奈子著『スポーツとLGBTQ＋――シスジェンダー男性優位文化の周辺』晃洋書房、2022年、8ページ。
（9）久保健「『からだ』問題再考――〈かうたたラブ〉の可能性――」、学校体育研究同志会研究年報『運動文化研究』Vol.41、2024年、33-34ページ。
(10) ベルナール・ジレ著、近藤等訳『スポーツの歴史』白水社、1979年、15-17ページ。
(11) 友添秀則『体育の人間形成論』大修館書店、2009年、33ページ。
(12) 中村敏雄『スポーツとは何か』ポプラ社、1972年、68-77ページ。
(13) アレン・グートマン著、清水哲男訳『スポーツと現代アメリカ』TBSブリタニカ、1981年、32ページ。
(14) 同上書、72ページ。
(15) ホイジンガ、前掲書、28-29ページ。
(16) 同上書、29-35ページ。
(17) 同上書、73ページ。
(18) R・カイヨワ著、清水幾太郎／霧生和夫訳『遊びと人間』岩波書店、1975年、13-14ページ。
(19) 同上書、13ページ。
(20) 同上書、17ページ。
(21) 同上書、17-18ページ。
(22) 同上書、51ページ。
(23) 同上書、55ページ。
(24) 遊びについては様々な解釈がなされてきており、先行研究の検討から筆者が注目した言説に、ジャン・デュビニョーと樋口聡のものがある。ジャンは、ホイジンガが遊びに規則があり競争的、闘技的活動であるとして遊びの領域を限定したことに反対して、ルールのない自由な遊びを重視する。ジャンは、「われわれは誰もが自分のチパサ（アルジェ近くの小さな町。ローマの廃墟で名高い観光地）を持っている。それは避難所、そこではこっそり想像力の種子が芽を吹き、わき立つ場所の祖型なのである。またそれは、どこからも風は吹いて来るオアシスで、（中略）オアシス、この閉ざされた場所は遊びの暗喩である。」（ジャン・デュビニョー著、渡部淳訳『遊びの遊び』法政大学出版局、1986年、133ページ）として、これまで研究者が見落としてきた広大で無益で遊びの世界に目を向けるよう促している。樋口は「遊戯を、現実にあらわれる行動や現象につけられた名称としてではなく、人間の行動の中に存する原理としてとらえなければならないという指摘」（樋口聡「芸術からスポーツへ――美学の拡張の試み――」『藝術研究』第6号、1993年、43ページ）に賛同して、「存在論的な原理として遊戯」をとらえることを主張している。彼らの研究は遊びの理論の再解釈としては重要かもしれないが、スポーツ論を展開する上では距離があるた

め、筆者はホイジンガとロジェ・カイヨワの研究を重視するものである。

(25) シェリル・ベルクマン・ドゥルー著、川谷茂樹訳『スポーツ哲学入門――スポーツの本質と倫理的諸問題』ナカニシヤ出版、2012年、65ページ。

(26) 同上書、69ページ。

(27) 同上書、70ページ。

(28) ロバート・サイモン著、近藤良享／友添秀則代表訳『スポーツ倫理学入門』不昧堂出版、1994年、35ページ。

(29) 川谷茂樹『スポーツ倫理学講義』ナカニシヤ出版、2005年、54ページ。

(30) 同上書、60-61ページ。

(31) 同上書、49ページ。

(32) 伊藤高弘「スポーツと現代」、永井潔／伊藤高弘『芸術・スポーツと人間』新日本出版社、1978年、169ページ。

(33) 竹内敏雄「技術時代の美学の問題」、竹内利夫監修『講座＝美学新思潮4　芸術と技術』美術出版社、1968年、10ページ。

(34) 永井潔「人間と芸術」、永井／伊藤、前掲書、51ページ。

(35) 伊藤「スポーツと現代」、同上書、155ページ。

(36) 同上書、155ページ。

(37) ニコライ・A. ベルンシュタイン著、工藤和俊訳、佐々木正人監訳『デクスティリティ巧みさとその発達』金子書房、2004年、284ページ。

(38) 同上書、15-17ページ。

(39) 山田憲政『トップアスリートの動きは何が違うのか――スポーツ科学でわかる一流選手の秘密』化学同人、2011年、197ページ。

(40) 平尾、前掲書、45-46ページ。

(41) 同上書、157-158ページ。為末のインタビュー記事は「『中学生まで全国大会はいらない』為末大さん　ヒントは駅のホームに」朝日新聞デジタル、2022年3月24日。

(42) 「世界陸上メダリスト、為末大が教える「走り方」で最も重要なこととは？」E STARTマガジン、2018年12月7日。[https://home.estart.jp/magazine/detail/8461]

(43) 前掲拙稿、10-11ページ。

(44) 関朋昭『スポーツ言論――スポーツとは何かへの回答』ナカニシヤ出版、2023年、53-54ページ。

(45) 久保正秋『体育・スポーツの哲学的見方』東海大学出版会、2010年、17ページ。

(46) 守能信次『スポーツルールの論理』大修館書店、2019年、42ページ。ただし、守能はこの件では、スポーツの価値について議論しているのではなく、「スポーツをすること以外にどのような利益も求めない」というスポーツの理念を示しているだけである。

(47) 関、前掲書、55-57ページ。

(48) 同上書、56ページ。

(49) 中西純司「『文化としてのスポーツ』の価値」、関西学院大学人間福祉学部『人間福祉学研究』第5巻第1号、2012年9ページ。

(50) 同上論文、9-10ページ。

(51) 同上論文、10ページ。

(52) 同上論文、11ページ。

(53) 中西純司「『スポーツ価値』のダイナミクスとスポーツ政策の課題」、『平成27年度日本体育協会スポーツ医・科学研究報告Ⅲ　新たなスポーツ価値意識の多面的な評価指標の開発』第2報、52-53ページ。

(54) 同上論文、49-52ページ。

(55) サイモン、前掲書、185ページ。

(56) 同上書、200-201ページ。

(57) 善と規律に関しては、同上書、188ページに記されている。

(58) 見田宗介『価値意識の理論――欲望と道徳の社会学』弘文堂、1987年、17ページ。見田は縦軸を「社会的パースペクティブ」に横軸を「時間的パースペクティブ」にして「価値の類型表」を表し、その表で「快―苦」を「＜現在＞中心」で「＜自己＞本位」の価値と位置づけ、「快―苦」を基礎として高次の価値へと止揚していくことを示している。「正―邪」は「＜未来＞中心」で「＜社会＞本位」である。「美―醜」は「＜現在＞中心」で「社

会的パースペクティブ」の最高位にある（同上書、32 ページ）。

(59) 同上書、17-18 ページ。

(60) 同上書、19 ページ。

(61) 作田啓一『価値の社会学』岩波書店、2001 年、14 ページ。

(62) 同上書、4 ページ。

(63) 同上書、10-11 ページ。岩佐茂はマルクスの思想に基づいて、価値と価値意識（価値評価）との関係を以下のように説明している。「価値とは主体にとってよきもの（欲求を充たすもの、有用なもの、望ましいもの、大切なもの）のことである。主体にとって客体のよき性状が価値あるものということになる。唯物論の視点からは、価値あるものは、価値評価されてはじめて価値となるのではなく、主体と客体と客観的な価値関連のなかで、主体にとって価値をもっているもののことを意味する。価値評価が価値に先立つのではなく、価値が価値評価に先立つ。」（岩佐茂『マルクスの生活者の思想とアソシエーション』桜井書店、2024 年、297 ページ。）と。三田と作田、そして岩佐と、その思想的立場は異なるものであろうが、価値と価値意識の相互規定的関係においては、ほぼ同じ理解に立っていると言えよう。

(64) 同上書、18 ページ。

(65) 同上書、29 ページ。

(66) 同上書、69-71 ページ。

(67) 同上書、447 ページ。

(68) 同上書、447 ページ。

(69) 作田啓一『恥の文化再考』筑摩書房、1967 年、261-262 ページ。

(70) 同上書、261 ページ。

(71) 守能も彼の著書の中で、スポーツは、ある定められた距離を走ったり、あらかじめ設定された空間にボールを投げ（蹴り）入れたり、ボールを打ち合って相手にミスさせたりするだけの無意味な行為であり、「つまりは本質において（中略）それ自体の中に生産性とか道徳性とかの価値を云々できるものではありません。」（守能、前掲書、42 ページ。）と記している。もちろん、私も守能も、その無意味に見えるスポーツが人間にとって掛け替えのない行為であることを強調するのである。

(72) 見田、前掲書、203 ページ。

(73) 前掲拙稿、18 ページ。

(74) M・チクセントミハイ著、今村浩明訳『楽しむということ』思索社、1991 年、66 ページ。

(75) 大山エンリコイサム「フローの感覚――バスケットボールの経験から――」、中尾拓哉編『スポーツ／アート』森話社、2020 年、276-277 ページ。

(76) ここで説明したことは、伊藤高弘が提起したスポーツ構造論を一部修正したものである。伊藤は、スポーツを現実の社会構造に位置づけて把握する「スポーツ三層構造」論を提起した。つまり、「スポーツをプレー（場面）、組織、条件の三層でとらえ」、条件に当たる「施設、賃金、余暇などは、スポーツ参加のいわば『土台』ともいうべきものであり、この土台の強度如何が、組織や最上層のプレーを左右するという構造を示すことが、スポーツ研究の基本」であり、そして、スポーツ構造の土台にあたるスポーツ施設や労働・余暇条件は「政治・経済・外交・軍事・食糧・資源・エネルギーなどの戦略的課題とリンクされる」と強調していた（伊藤高弘「スポーツの構造と認識」、伊藤・草深・金井編『スポーツの自由と現代』上巻、青木書店、1986 年、7-8 頁）。

(77) 見田、前掲書、23-24 ページ。

# 和文抄録

## スポーツの本質と価値の理論

青沼裕之

本稿の課題は、スポーツの本質と価値の究明にある。まずはスポーツの本質について検討するに当たり、膨大な先行研究の中から検討に値する論文、著書を選んで批判的考察を加えていくことにする。本稿で対象とするスポーツは今日の世界に普及している近代スポーツに限定する。また、体操やダンス、武道、eスポーツがスポーツなのかというように個別的に追求していくことはせず、スポーツとはこういう特性や独自性をもった文化だというように普遍的に追求していく。そして、スポーツを普遍的に追求していくために、スポーツを内在的・外在的の両面からとらえていく。次いで、スポーツの本質究明を果たした後で、スポーツの価値について検討する。以上の観点に基づいて検討した結果を以下に簡潔に示す。

スポーツの本質は、運動課題を正確に、迅速に、合理的に、機転を利かして解決する巧みな動きにあると筆者は考える。巧みな動きとは、アスリートが自らの身体を制御し道具を操作してコートやグラウンドで表現する行為そのものであり、その行為を具体的に成り立たせているのが技術である。技術は運動課題の合目的的かつ合理的な解決方法を内包した行為の形態だと考えるから、技術にスポーツの本質が表れる。アスリートは技術を洗練させていくことが究極の目的であり、洗練された技術によって巧みな動きが生み出されるのである。

そして、スポーツは行為の文化であるから、行為の中で価値は創造される。つまり、これまでのアスリートたちが洗練させてきた巧みな動きの中で価値は創造されてきたのであって、個々のアスリートの主観や気分に価値が見出されるわけではない。それはアスリートの価値意識である。筆者は、スポーツの巧みな行為の内に創造される価値を、「巧み」、「美」、「快（フロー）」、「公正（フェアネス）」だと考えている。

# Abstract

## Theories on the nature and value of sport

Hiroyuki Aonuma

This study examined the nature and value of sport. First, to examine the nature of sport, we review and critically analyze the internal and external perspectives in previous research on general to examine their cultures, characteristics, and uniqueness To pursue sport universally, we look at sport from both internal and external perspectives. The value of sport is more closely examined after this.

The literature review and analyses reveal that the essence of sport lies in skilled movement to accurately, quickly, rationally, and tactfully solve motor tasks. Skillful movement is related to the control an athlete exercises over their body and their ability to correctly manipulate any equipment on the field or ground to express themselves. Therefore, technique is the foundation of purposeful and rational solutions to an athlete's motor tasks. The goal of every athlete is to refine their techniques to achieve skilled movement.

Because sport involves a culture of action, its value is closely related to these actions. In other words, an athlete's sense of value is derived from their mastery of the skilled movements required for their specific sport rather than subjectivity or mood. It is concluded that the values created through skillful sports acts are skills mastery, beauty, enjoyment（flow）, and fairness.

人文・自然研究　第 19 号